

---

## ~ 怪異探偵 ~

黒神マコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～怪異探偵～

### 【Nコード】

N1514D

### 【作者名】

黒神マコト

### 【あらすじ】

十二時。それは日と日の境界を生み出す魔の刻。殆どのものは床につき、夢の中へと旅立つ。一部のものは目を開け、活動を続ける。そしてごく稀なものは、夜の怪異に取り憑かれる。そんな魔の刻。そこに在るのは人の認識の内に存在し、人の常識の外で蠢く怪異。人は彼らを生み出し、そして彼らに滅ぼされる。

## 第一話『人形1』

今日もまた電話が鳴る。

リリリリリと鳴り響く電子音が、まるで相手の怒りを表しているように聞こえるのは気のせいなのだろうか。

最初に言っておくが電話の相手は別に借金取りなどではない。

そりゃ両親のいない孤児ではあったが、バイトしながらちゃんと学校にも通い、それなりに順調な人生を歩んできた。

何が狂ってしまったかはわかっている。何が狂わせてしまったかはわかっていない。

狂ってしまったのは私の日常で、狂わせたのはあの人形だ。

私には孤児院の頃から大切にしていた人形があった。

それは院長先生が私に買ってくれた当事売っていた着せ替え人形だ。金色のブロンドに栗色の大きな瞳をした、私の人形。

私はそれにマリーと名前をつけてそれはもうたいそう可愛がった。

それを私は捨ててしまった。

きっかけは些細な事だった。

押入れを整理していたら見つかった懐かしい人形。

だがそれは長い年月をかけてボロボロに汚れていた。

手入れをすれば以前の輝きを取り戻したただかもしれない、それに思えば出深かったものがあったのだが、さすがにもう自分には必要ないと思って、捨ててしまったのだ。

マリーを捨てたその翌日の夜の十二時。

一本の電話がかかってきた。

最初は同じ学校の彼氏かと思った。

この春に告白して、生まれて初めて好きになった異性だ。  
こんな時間に何かと思いながら受話器を取って耳に当てるとそこからは彼の声とはかけ離れた、まるで怨嗟を押し殺して、喉奥から声を引きずり出しているようなそんな擦れた声が聞こえてきた。

『こん ば。 んわ、 わた、 しマリー、 よ』

最初は彼氏の冗談かと思った。

マリーのことは彼氏にも話した事があつたし、私の彼はこの手の冗談が好物なのだ。

どうせ今回もどこかで聞いた事のある怪談のマネだろう。

私は笑いを堪えながら「いつからマリーなんて名前になったの？」と冗談の一つでも言おうと頭で考えたとき、ふとある考えが頭をよぎったのである。

私はマリーの話はしたけど、マリーを捨てた等と言った覚えは一度もないのだ。

もちろんマリーを捨ててから彼と話した覚えもない。

冷や汗が顔を伝った。

今すぐ受話器をおきたい。だが、体全体が凍ったように動かなくなり、受話器を耳から放せないのだ。

『今、ゴ。 ミ焼却じよ、 うに居るわ。 すご、 く熱かったわよ…ミノリち。 ちゃん』

そう電話の主が言い終わつたと、抑えきれなかった怒りを受話器にぶつけたような大きな音ともに電話は切れた。

そして今日、また十二時を時計の針が示すとともに、電話の音が鳴り響いたのだ。

それに対して私が取れるのは、電話に出ない、という簡単な方法だけだった。

だが、その電話に対する恐怖は昨日のうちに心の芯に植えつけられてしまい、今私はベッドの上から動く事が出来ないというなんとも情けない状況にあった。

それにしてもこの待機音はいつまで続くのだろうか、もしかしたら朝まで続いたり、一生止まなかったりするかもしれないが、せめて昼に何か対策を取ろう、そう考えていたそのとき。

『ピ　　、ただいま電話に出ることが出来ません。ピ　　と  
言う発信音の後にメッセージをお願いします』

しまった！　そのとき私は恐怖のあまり留守番電話の存在を忘れていたのだ。電話には触れなくなかったが、もうこうなっては取る手段は一つしかない。

そう決意し、私はベッドから飛び出て電話のコンセントとケーブルを引き抜いた。

これで電話は機能しなくなる。文明の利器は電気というエネルギーと切り離されると途端にガラクタへとランクダウンするのである。だが、留守番電話の音は止まる事がなかった。

『ピ　　』

「なっ…なんで!？」

電源もケーブルも全て抜いた。なのに電話からは発信音とボタンの光が消えていなかった。

『こんばんわ、私マリー、よ。今、  
×交番。の前に居るわ』

そこから発せられたのは昨日よりも流暢で、そして静かに憎しみのこめられた声だった。

次の日、私は彼氏にその事を相談しようとした。

だがその日、彼は学校を休んでいた。

いや、それで良かったのかもしれない。

最愛の人をこんな事に巻き込んではいけない。

そう思うと、今日彼が学校に来てくれなくて良かったと思った。  
たぶんその顔を見たら泣きついてしまっただろうから。

私はその日の夜になる前、私は家の中から音を出す機械を全て捨てた。

電話はもちろん、ラジオを聞く事もできるオーディオプレイヤーから、テレビまで。重労働ではあったが、電話の恐怖に比べればまだマシだった。

だけどその時、私にはもしかしたらわかっていたのかもしれない。

そんなことをしても無駄だと。

その日の夜も十二時はやってくる。

もう電話はかかってこない。音を出すものは全て処分したのだから。そう思っているにもなげか安心する事はできなかった。

頭の中を廻るのは「かかってくるな」という祈りだけ。  
だが、その祈りは十二時とともに砕け散ってしまった。

音を出す壁掛け時計や目覚まし時計は捨てたので、今この部屋の中で時間を示すのは小さな安物の腕時計だけとなった。  
そして、腕時計の針が十二時に達した瞬間、

音をたてて窓ガラスが割れた。

「！」

最初は何かと思ったが、周囲を見渡して、状況を把握してみると、窓ガラスの破片の散らばる床に、赤くて丸い何かがあった。

おそらく石か何か、重くて硬いものを包んだ赤い紙球が、窓の外から投げ込まれたのである。

だが、ここはマンションの七階である。よほどの強肩でないかぎり、ここまで石を投げ込める人間など居はしない。

赤い紙は、よく見てみると手紙の入った封筒だった。

いや、よく見ていたら石から紙が、まるで自分の意思を持つように離れ、皺一つない新品同様の手紙の形を取り戻したのである。

私はそれから反射的に後ろへ後退した。

後退といっても腰が抜けて立てず、手と足を使って必死に這いずっただけなのだが、それでも、今は1cmでも良いから、あの赤い手紙から離れたかった。

手紙は、元の形を取り戻したと思ったら今度は自動的に封が解かれ、ノイズ交じりの音が流れてきた。

よくバースデーカードなどに使われる、開くと音楽の流れる手紙だったのだろうが、その時動揺していた私には、手紙が意思を持って話しかけてきてるように聞こえたのだ。

『こんばんは、私マリーよ。今、あなたの家の近くのコンビニに着いたわ。もうすぐ会えるわね、ミノリちゃん』

今度はノイズが混じっていたが前回前々回と比べても明らかに声の

枯れが無くなっていた。

声だけ聞いたならば、透き通った綺麗な少女の声に聞こえたかもしれない。だが、やはりその言葉からは押さえきれない怒気が滲み出ていた。

用件が済んだのか、赤いメッセージカードはマジシャンの使う一瞬で燃えるランプのように、その燃えカスを一切残さず、その場から消滅した。

恐怖ももう限界だった。叶う事なら狂ってしまいたいと思つた。明日の十二時、まず間違いなくあの人形はここまでやってくるだろう。

そして、私を殺すのであろう。

方法など想像がつかない。残酷に、残虐に殺されるのか、それとも一瞬で、気づいたら殺されているのか。

だが、どんな方法であろうと、明日の十二時までに何とかしなければ私はまず殺されてしまうだろう。

どこか別の場所に逃げるか？

だめだ、恐らくあの人形は何処までも追ってくる。

それこそ地の果て海の果てまでも、そして、毎日十二時に恐怖の先刻が届く。

こんな調子では逃げることは出来ても先に精神がやられてしまう。

やっと、やっと楽しみを見出してきた人生。この歳で死にたくない。

次の日、私はふらつと街へ出た。

その日はちょうど日曜日で、学校は休みだった。というか、おそらく日曜日でなくてもその日は学校に行く気力など無かつただろう。

街へ出た理由は…わからない。

気分転換に、とも思ってたのか、人生最後の買い物を楽しもうと思つたのか、



はたまた自分でもわからない他の理由か、とにかく私は何かに導かれるように街へ出たのだ。

いつもは鬱陶しい人ごみも、自分以外の人がいるというだけで安心する事ができた。

街に出て別段何かしたわけではない。

ただ適当な店に入って小さなストラップを買ったり、喫茶店で軽い昼食を取っただけ。

もっと高級なかばんを買ったり、中華のフルコースとかを食べればよかったのかもしれないが、なんとなくそんな気に離れなかった。人生最後になるかもしれない日を楽しむ余裕は今の私には無かった。たいした気力も無く、まるで亡霊のように街を彷徨い歩き、公園のベンチから噴水を眺めていたら、なぜか眼から涙がこぼれた。

その時私は、生まれて初めて日常の尊さを知ったのだ。

生を、命を、日常を失う事の喪失感は、まるで自分の心臓が欠けたかのような虚しさで、眼からこぼれる涙は止まらなかった。

痛みが恐ろしいのではなく、日常を失うのが恐ろしかった。

死ぬ事が悲しいのではなく、もう他の人に合えないことが悲しかった。

無知だった事が怖いのではなく、今まで麻痺していた日常の価値を、ちゃんと理解する事が怖かった。

十数分。私は涙を流し続けた。夏場の地面は零れ落ちる私の涙を受け止め、跡形も無く消し去ってくれた。

まだ日も高く、やろうと思えば恐らくたいのことは出来るかもしれない。

今からでも貯金をおろして、贅沢三昧スゴすのも悪くない。

だけど、それをしようという気力は体に残っていない。

ほんの数日間。死の予告が近づいてくるだけで、人は今までの日常の尊さを知り、自分の弱さを知り、そして生きるための気力を削ぎ落とされる。

私は重い腰を上げ、公園を後にした。

そのあと私は自分が何処を歩いたか良く覚えていない。

ただ足を動かし、歩くという行為を行っていただけ。

だから、そこにどうやってたどり着いたかはわからない。

そこは、古そうな三階建てのビルで、その二階の同じく古びた看板にはこう書かれていた。

『犬神怪異探偵事務所』

## 第一話『人形1』（後書き）

ホラー+アクションで書いていきたいと思っています。

執筆スピードがそんなに早いわけではありませんが、よろしく願  
いしますw

## 第一話『人形2』

何の冗談だと思った。

いくらなんでも都合が良すぎるだろう。と思った。

いやいや、ありえないありえない。まだ普通に「霊能力者事務所」とか書いてるほうが信じられるよ。と思った。

今現在、私は異形の怪異に悩まされている。

それは、「私が捨てた人形が復讐のために一日ごとに近づいてくる。」というものだ。

最初の電話からはや四日目の今日。

人形はもうすぐそこまでやって来ていて、今日の夜十二時にはこちらに着くらしい。

そして私を殺す。

そんな迫り来る死におびえ、精神をすり減らしていた私は、目的は無かったが街へ出た。

さして何をすることも無く、日常のヒトコマを過ごしていた私は、これが明日には終わってしまうと感じて、無性に泣きたくなくて事実泣いた。

泣き終わってからとりあえずその場を離れ、目に残った涙で前が微妙に見えない状況でふらふらと歩いていたら、なぜか目の前には古びた三階建てのビルがあつて、その二階の同じく古びた看板には何かの冗談のようにこう書かれていた。

『犬神怪異探偵事務所』

もうなんだか地獄に仏というより、地獄に異文化異教の見知らぬ神様が落ちてきたような感じだった。

私もまだ『犬神探偵事務所』って書いてあるなら普通に見てスルー

したかもしれないが、  
何度見直しても「神」と「探」の間に明らかに不要な『怪異』の文字が入っていた。

何度も何度も擦り過ぎて、泣いて目を腫らしていた時よりも目を赤くして、それでも古びた看板の文字は

# 『犬神怪異探偵事務所』

最近非現実的なことが連続したせいなのか、私はその看板と数分戦った。

「ううう、痛い……」

本当にヒリヒリする。いくらなんでも擦りすぎた。うん、もう少しこれからは早く現実と受け止める事にしよう。

結局、いくら目を擦っても看板の文字は変わらず、私は素直に事実として受け止める事にした（所要時間約五分三十秒）。

さて、現実として受け止める事にはとりあえず成功したが、この後どうするか、が問題である。

正直言って入りたくない。

なんかヤバイ予感がする、うん、かなり。

だって看板に『犬神怪異探偵事務所』なんて普通に書く人が経営してる所ですよ。というかなんかビルのぼろさ加減から言って、まず間違いなくお客さん多くはないでしょう。

なんというかあれです、客のいないラーメン屋より、まだ客のいる定食屋に行きたくなる気分です。（この場合の定食屋は霊能力者関連という事で）

ああ、今すぐLIFEカードが欲しい。どうする？ どうするよ私！？

悩んだ末、私は五百円玉の裏表で決めることにしました。

表が出たら覚悟を決めて入ろう。裏が出たら他のもう少しまでも？  
そんな霊能力者を探そう。

親指の上に乘せられた五百円玉は、綺麗にはじかれ、ぱしっ、と私の手の中に納まった。

恐る恐る手をどけてみるとコインは 表だった。

「……ま、まあ今のは練習という事で」

誰も聞く者はいないが、しいて言うなら自分に言い聞かせている。  
再び親指の上に乗せられた五百円玉は、二度目も綺麗に宙を舞い、  
そしてまた表を出した。

「ニッ…2分ノ1ノ確率デスヨ？ グウゼングウゼン」

もはや入りたくないという現所有者の一心だけで、何度も何度も五百円玉は宙を舞い、そして何度も何度も表を出した。

「……」

結局、運命（五百円玉）の意思？によって私は『犬神怪異探偵事務所』のドアをたたく事にした。

階段を上り、ドアの前に立つと、やはりドアにも『犬神怪異探偵事務所』のボードが貼られていた。

ここまで来て躊躇するのモイヤだったので、残った勇気を振り絞って小さくドアを2回ノックした。

正直この時私は、どうか何か適当な休業日で中には誰もいませんように、と心の中で願っていた。

数秒後、願いは叶わず、ドアはギギギッとホラーな音を立てて、ゆっくり内側へ開いていった。

だが、そこにはドアを開けた人物がいなかったのである。

さっそく家には帰りたくないがどっか適当な所に帰りたくなった。

こんな時に発動するのねマイ帰巢本能。

「おい」

そんなことを考えながら一歩身を引いていると、何処からともなく声が聞こえてきた。

まだ幼い、少女のような綺麗な声。

だが何処かその声には高圧的な何かがあって、私はさらに一歩身を引いた。

「どっ……どこから……」

周囲を見回すも、声の主は見つからない。

マリーの声とは違う、だが近くから聞こえるのに誰もいないという状況は、昨日からあの声に恐怖心を植えつけられた私には耐え難いものだった。

「……その反応は私を侮辱しているのか？」

「へっ？」

よく聞くとその音源は自分の足元からすることが分かった。  
目を下に向けてみるとそこには

背伸びしてドアノブを掴み、プルプルと震えながらドアを開けている小さな女の子が居た。

「  
」

「おい…安心してないで…自分で開ける…もう足が……」

「はっ！ ごっ…ごめんね、小さいから気づかなくて」

そのとき理解した。ドアを開けた人物は、居なかったのではなく、ドアに隠れて見えなくなるほど小さかったという事に。

私はとりあえずその少女をドアから解放するために自分で最後まで開けて、中へ入った。

中は意外と普通だった。といっても玄関からしか見えていないが、テレビドラマとかでたまに見る探偵事務所とさして変わらない。

足の低いテーブルを挟むように置かれた二つのロングソファ。本棚にもタイトルは見えないが小さまざまな本が納まっている。もう少し置くに行けば、パソコンとかが置かれた大きなデスクが見えて、そこにこの探偵事務所の主が座っていることだろう。よかった、なんだか普通っぽい。

「おいこらその」

「ん？ どうしたのかな？」

下から高圧的な態度と可愛い声を発してくるのは先ほどかなりがんばってドアを開けてくれた女の子だ。

背はすごく小さく、今はあまり言いたくないが、まるでお人形さんみたいだった。

黒くて長い髪は後ろで太い一本の三編みに編まれ、たとえば悪いが黒い海老の尻尾みたい。

その髪とは対象に、彼女は輝くように白いワンピースを着ていた。

これで笑っていれば抱きしめたくなくなるくらい可愛かったのだろうが、その顔はどう考え、どの角度から見てもご機嫌斜めである。

私は目線を合わせるためにひざを曲げて手を置いた。

「何か言う事はないか？」

「あ、さっきはゴメンね。すぐに開けなくて、大変だったでしょう？」



「違う！」

空手や柔道などで一括するときのように、その小さな口からは空気を震えさせるような怒声が響いた。

「何か訂正する事はないか？」

「訂正？」

「さっき私がドアを開けてやったときに何か言わなかったか？」

さっきドアを開けたとき？

そのとき私が話した事といえば。

はっ！ ごっ…ごめんね、《小さいから》気づかなくて……

…。

あっ、あれか。

「ゴメンね。気にしてたんだね。背が小さいこ」

「違う！」

また空気が震えた。

「断じて私は小さく等とは無い！ あれだ、お前らがデカすぎるのだ！ 私もこんな体じゃなかったら今頃は……っ！」

最後の言葉を言っている途中、彼女はまるでうっかり秘密を漏らしてしまったかのように口を押さえ、少しの間黙り込んだ。

「とっ…とにかくだ！ 私は小さく等とは絶対にない！ これは日本女性の標準体型だ！」

彼女は無い胸を精一杯張って断言した。それが日本女性の標準体型だったら日本男子はすべからくりコンである。ん、背伸びした年頃なのだろうか？

「じゃあ、これあげるから許してくれない？」

私はかばんの中から小さな紙袋を取り出して彼女の小さな手の中に

置いた。

「なんだ？　これは？」

「開けてみて」

なんだか物珍しそうな彼女の顔を見ていると、さっきまで精神が限界寸前だった自分が小さくなっているのが分かった。なんだか少しだけ世のロリコンの気持ちに分かった気がする。

彼女は綺麗に紙袋を止めていたテープをはがし、中身を取り出した。几帳面な性格のようだ。

「おお」

袋の中から顔を出したのは、私がさっき買った携帯ストラップだった。

黄茶色いトラ模様のネコがキュートなストラップだ。

彼女はそれを自分の視線と同じ位置に持って行って、歳相応に目をキラキラさせながらそのストラップを凝視している。

どうやら喜んでくれているようだ。

「こっ、これをもらってもよいのか？」

「うん、家にまだ似たようなの一杯あるから」

彼女は再びおお、と目を煌かせながらそのストラップを見て、ハッとして返って、先ほどの高圧的な雰囲気を生み出した。けど。

「よっ、よし。これでさっきの失言はチャラにしてやろう」

「ありがとうね」

そっぽを向いてしまったが、どうやら照れ隠しのようである。

ストラップ一つでここまで喜んでくれるとこちらも上げたかいがあったというものだ。

彼女は大事そうにワンピースのポケットにストラップをしまいこんだ。

「…ところでここに何のようなのだ？」

「あ」

本題からすぐく逸れていた事に今気がつきました。

## 第一話『人形2』（後書き）

「人形1」が少し暗かったので、2は少し明るめにしてみましたw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1514d/>

---

～ 怪異探偵 ～

2010年10月13日23時27分発行